

好奇心漫遊記：世の中面白い事だらけ

数学編-1：サルーへビ = 3

矢澤 洋二

あけましておめでとうございます。

この度皆様の仲間入りさせていただいた矢澤です。どうかよろしく申し上げます。

これから「好奇心漫遊記」と題して日頃の「アレッ？ どうして？ なぜ？」を面白可笑しく話題にして行こうと思っています。高校生程度の知識を前提として。

今回はその第一回数学編です。

今年は皆様にとって何年ですか？平成16年だという人がいるでしょう。2004年だという人が多数派でしょうか。昭和79年だという人もいるでしょう。極々稀にヘジュラ1382年だという人がいるかも分かりません。

私は「今年が入社何年目か」という時等のために数年前までは昭和

和n年で年を数えていました。自分の人生の出来事からの経年数をカウントするのは主に「79-n」という計算をしていたのです。最近はそのがしんどくなって「104-n」という計算にシフトしています。平成になってからの出来事を西暦で認識しているケースが多くなったからです。皆様はどうですか？



われわれは生涯の内に元号が変わるのはせいぜい二回、三つの年号を経験する程度ですみます。明治・大正・昭和、ないし昭和・平成・次元号など。

ところが！昔の人、江戸時代などは生涯に何回も元号が変わったわけですね。

例えば1641年からの20年間をみます

と、寛永から正保(1644)、慶安(1648)、承応(1652)、明暦(1655)、万治(1658)、寛文(1661)と六回元号が変わり、7つの元号があります。

もし私が寛永20年に会社に入ったとすると、正保3年に結婚し、正保4年に長女が生まれ、慶安4年に次女が生まれ、承応元年に三女が生まれ、明暦元年に長男が生まれたこととなります。その

時私が入社何年目だったのか、問われたら明暦から承応、慶安、正保、寛永と何回も計算しなおさなければいけません。その頃は会社は無かったのかもしれないけれど、丁稚奉公して二十年たったらノレン分けしてやる、と約束された人はどうやってその年を数えたのでしょうか？

当時は西暦も無かったわけですからね。江戸時代には多分皇紀もなかったのではないか、と思います。(これは調べてみないと分からない) つまり数百年単位を通じての共通の座標軸はなかったことになります。当時の人は一体どうやって年を認識し、年数を数えていたのでしょうか。

かつて元号が頻繁に変わる時代に生きた人達は年数をどのように数えたのか？元号が頻繁に変わる事が生活に支障をきたさなかったのだろうか？というのが今回の NAZE?です。

人間が年をどう認識するのか、というのは結構人生観に大きな影響を与えているような気もするのです。以前、松本俊介という画家の展覧会へ言った時、絵の下に書かれている製作の年号が、西暦で書かれていたり、昭和で書かれていたり、皇紀で書かれていたりして、作者の心の動きが垣間見れて面白かった事を覚えています。(閑話休題)

その NAZE に対する答えが今回の表題なのです。昔の人は「申一巳 = 3 or 1 5 or 2 7 or ...」という計算が即座に出来たに違いない。つまり昔の人は十干十二支で彼等は年を認識していたに違いない、というものです。

今年は 2004 年であり平成 16 年であるのと同時に「申」年でもあります。われわれは今年が申年であることを年賀状を書く時と生まれ年で占いをする時にしか意識しませんが、昔の人は一年中今年が申年であることを意識して暮らしていたのではないか。さらに言えば、入社した年が辰年だったのか寅年だったのかも、自分が結婚した年が巳年だったのか未年だったのかも明確に覚えていたはずです。そして彼等は「午一辰」が何年になるのかという計算もすぐに出来たと思います。

物を数えるのに数字以外の概念を使う、というのは非常に不合理な事に思えますが、合理主義が支配する現代でも普通に行われている事です。例えば欧米では 1 月 2 月 3 月を "First month",

"Second month", "Third month"といわないで January, February, March というではありませんか。彼等は「September — February」というような計算をする時に不便を感じないのでしょうか？日本でも昔は古典で習ったように「睦月」「如月」「弥生」という月の呼び方をしていました。これがいつから1月2月3月になったのか、調べたら面白いかもしれない。

江戸橋にある「印刷博物館」には創刊当時の東京日々新聞が展示されていますがそこには「明治五年九月某日」とありますからその頃は既に「睦月」云々はなくなっていたのでしょうか。

まだまだ例はあります。曜日です。

僕は月曜日、火曜日といいますが、中国語では第一曜日、第二曜日という言い方をします。(正確には星期一が月曜日、星期二が火曜日・・・)彼らから見ればどうして月・火・水がこの順番なのか理解に苦しむのではないのでしょうか。(ちなみに陰陽五行説では「木・火・土・金・水」の順です。)

そう言えば「ついたち」「ふつか」「みっか」という言い方だって1が「いち」2が「に」3が「さん」と教わった欧米人にとっては難しい呼び方かも知れません。「とうか」を過ぎて11日に「じゅういちにち」になった時安心するのでしょうか。丁度我々がイレブン、トゥエルブを過ぎて13がサーティーンなったとき安心するように。

物事のカウントをする事が必ずしも数字につながるわけではない、という事でした。いろいろ調べてみると、十二支と「ドレミファソラシド」とには関係があるようですよ。確かに1オクターブの中には半音も入れて丁度12の音がありますよね。

これはまた別の機会に書きます。

